

## 名古屋大学史編集室設置の頃

元専任編集室員 井上知則

昭和六〇年五月一六日、名古屋大学の初めての〈正史〉を編集するため「名古屋大学史編集室」が設置された。本部署事務局二号館三階の一室（旧庶務課）に机・椅子が各三とソファ―セット一、それに簡単なお茶出し戸棚が備えられているだけの部屋であった。部屋の奥の東側に江藤恭二編集室長（編集委員長）の机、ソファ―セットを挟んで対面した位置に私（編集室専任助手）の机、私の横に井口千世事務補佐員（現名古屋工業大学勤務）の机があった。あまり広くない部屋であったが、それでも部屋の其処此処には空間が多く残されていた。

編集室初日は、われわれ編集室の住人三人と庶務課員とが江藤先生持参のお菓子と井口さんのいれたお茶で雑談したあと、先生の手で墨書された「名古屋大学史編集室」の標板を掲げた。それを先生と一緒に懸ける私の、写真が手元にある。今見ても、あの時の緊張感が伝わってくる。

編集室の活動については、ほぼ全面的に江藤先生に相談し、指導を仰いだ。とりわけ年史編集に直接関わる内容構成（シラバス）や資料収集の手立てなどには、大層お手数を煩わせた。例えば、内容構成や資料収集のため旧帝国大学を中心にいくつかの大学の年史編集作業を参考にしなければならなかった。東京大学をはじめ広島、九州、東北等の大学を、私を連れて訪問して頂いた。その際の当該大学への連絡交渉は本来助手の仕事である。しかし、こうした手配を先生ご自身がなさり、すべての御膳立てをして頂いた。私達が当該大学に到着すると、先生の旧知の教授による出迎えを受け、大学史編集室等へと案内され、そこで担当者から編集実務についてのノウハウ等を教

えてもらった。実に丁寧にして円滑に私達の出張目的は遂行されていた。先生の御膳立てがなければ、あのようには進まなかつたであろう。学内でも各学部などを積極的に訪ねて歩かれ、各部局が保管している資料などの情報を集めてくださった。初期の編集室の資料は、こうした江藤先生からの情報をもとに入手したものが多し。

編集室をより機能的にするために、編集室を整備することも私の仕事であった。しかし、創立五〇周年の基金の寄付が進まない状況のもと、編集室の経費の捻出には事務当局も大変苦労されていた。例えば、年史編集に必要な書籍や資料を置くための書架が必要であったが、新規購入が認められたのは二本分のみであった。教育史や大学史関係の私の書物だけで、それは一杯になった。これから収集する資料や書籍を置く書架はない。そこで書架の追加設置を庶務課にお願いした。もちろん江藤先生からも申し入れてもらった。庶務課も書架が必要なことは理解したが、それを購入する費用が出ない。結局、旧古川図書館で使用していたものを、年代測定器センターから借り受ける形で書架を増やすこととなった。できる限り経費をかけずに、編集室を整備するためのこうした工夫を教えてください。それは本部の事務官であった。因みに書架同様ワープロも他の部署で使われていたものであったし、先にあげた机、椅子、ソファ等、備品のほとんどがリサイクルであった。

初期の実際の作業は、中央図書館はじめ学内にある大学史資料や関連文献の所在確認とその主要なもの複写(写真または電子コピー)であった。各部局から借用した資料・文献をかかえ、本部へのあの坂を登ってくるのは大変であった。しかし、複写するのはもっと大変な作業である。カメラによる接写は私が行なったが、電子コピーは井口さんにしてもらった。彼女が名古屋大学に採用されたの昭和六〇年の四月であり、庶務課の仕事をしながら、編集室開設の準備を手伝っていた。編集室設置と同時に編集室の事務補佐員となった。二〇歳を過ぎたばかりの若いお嬢さんに、毎日毎日、資料・文献の複写やその整理をお願いするのは気の毒であったが、彼女は明るくよく働い

てくれた。のちには編集作業で必要となる校正実務を通信教育で勉強していた。年史編集日程の遅れにより、彼女がその校正の実力を発揮することができなかつたのは残念なことである。

私は編集室在職中、多数の方々に支えられて仕事をしてきた。学内外から資料をお寄せ頂いた方々をはじめ、飯島、早川両学長、編集委員や執筆を担当された諸先生方、事務官諸兄等々……。これらの多くの方に出会えた幸せな環境で仕事ができたと感謝しながら、筆を擱くこととする。

(朝日大学教授)

## 回顧

元専任編集室員 勝山吉章

専任編集室員としての経験は、現在の私にとって本当に貴重な宝物となっています。

一九八八年の春、ベルリン・フンボルト大学に留学中。江藤先生から井上知則助手の後任になる気持ちがあるかどうかの有無を尋ねる手紙が来ました。正直言って「ほんまかいな？」と思いました。

私の専門は十九世紀のドイツの幼児教育史。日本の高等教育史に関しては何とんど無知といってよいぐらいでした。篠田弘教授のゼミで、日本教育史研究の初步的事項は学んだとはいえ、不安だらけの出発でした。

助手に着任した当初は、『部局史』の原稿があがってくる最中で、江藤先生や井上さんと各部局を廻りながら、原稿の催促をしてまわりました。どの先生も多忙なかでの執筆だったため、なかなかいいご返事をいただけなかつ